寅さんの小樽ツアー*
—シリーズ15話チャプター5あるいは入れ子式物語—

高橋　純

1．チャプター5は笑いを取らない

喜劇映画「男はつらいよ」シリーズの数ある物語は、「フーテン」の寅さんが身のほど知らずに「かたぎ」のマドンナに思いを寄せるが、さんざん笑いをとった挙句、結局振られて叶わぬ恋に終わるというのが基本的なパターンである。井上やすし氏はこのシリーズの偉大なるマンネリ性を、「構造がじつに堂々として安定している」裏返しの「貴種流離弾」であることに見ている。[1] 世にある多くの物語に共通するこの形式は、通常は〈尊い家柄に生まれた英雄が、運命の命じるところによって本郷を離れて流浪し、幾多の苦難を女性の助けなどをかりて克服し、ついに本郷へ凱旋する物語〉となるところだが、寅さんシリーズでは構造はそのままに中味をあべこべにして、〈ごくフツーの家に生まれた烏滸(おこ)な男が、つまらないことで本郷を離れて流浪し、たいした苦難もないままにむやみに女性に惚れたりして一向に向上もせず、なすところなく本郷に帰って、またそこで悶着を起こす物語〉としてパターン化されているのである。

だが実際にはこのパターンにさまざまなバリエーションが伴わなければマンネリはたちまち退屈さに堕してしまうだろう。そうならないための仕掛けや工夫が毎回凝らされていればこそ、この偉大なるマンネリシリーズは、マンネリでありながら個々に独自性を見せる起伏に富んだ「長い1本の映画作品」となっているのである。基本的パターンから外れるものとしては、①第29作「寅次郎あじさいの恋」のように堅気の女性（いしだあゆみ）から慕われながら、寅次郎が相手の幸せを思い遣るゆえに断念するか、②「リリー4部作」のフーテン同士の愛の不可能性を物語るかのいずれかの形式に収まるものとなると言えるだろう。そしてそれらの例外的物語は、大多数を占める基本的パターンの物語からの偏移の程度に比例するかのようにして、寅次郎シリーズの「長い1本の映画」の本質的テーマを効果的に浮かび上がらせてくれる。そのためにこれらの作品は一層強く観客の共感を呼び起こす秀作となっている。ここではその一例として、シリーズ第15話「寅次郎相合い傘」を物語論的に検討してみよう。

この作品はシリーズ48作の中でもベストスリーに入るとか、五指に数えられるとか言われる傑作として評価が高い。その理由は、登場人物のキャラクターに負うところも大だろうが、物語の構成そのものに重要な鍵があることを見落としてはいならない。その点を見逃すと、この作品で、フーテン同士の実らぬ恋という「別世界の話」がなぜ堅気の庶民が共感できるお話に仕上がっているのか理解できないだろうからである。

まずストーリーを見てみよう。ここでは『寅さん大全』のなかの実に的確な各作品の梗概から当該部分を紹介する。

> 家出をした中年のサラリーマン・兵頭（船越英二）と珍道中を繰り広げていた寅さんが、またまたリリー（浅丘ルリ子）と再会した。リリーは、寿司屋の亭主と別れてまた歌手に戻っていたのだ。「寅さん、あれからどうしてたの」「恋をしていたのよ」息もぴったりの二人。さ

さいなことから喧嘩別れもしたけれど、柴又へ戻るとすぐ仲直りと相成った。腕を組んで買い物に行ったり、相合い傘で帰ってきたり、御前様が眉をしかめるほどの熱々ぶり。そんな様子を見たさくらは、リリーに寅さんと結婚してほしいと頼む。リリーの返事は「いいわよ」。けれど寅さんのほうが本気にしない。かくして二人の恋は、また平行線のままとなるのだった。[2]

物語の外枠はまさにこの通りなのだが、この梗概の中の「ささいなことから喧嘩別れもしたけれど」という個所には作品全体の理解にとって重要な手がかりとなる秘密が隠されているのである。シリーズ15話のこの作品は約90分のDVDに収められており、この「喧嘩別れ」の一言でくくられている部分は、全編12チャプター、計90分（チャプター１の恒例の「夢」を除けば80分）のうち10分余りを占めるチャプター５である。そしてこのチャプター５は、梗概では街の名前も挙がらないが終始小樽ロケで構成されている。そしてこのチャプターのみで一つの独立したエピソードを提示しながら、なぜか笑いを取るところが皆無なのである。ではこのチャプター５は作品全体に対していかなる意味をもちうるのだろうか。それを知るために、まずはこのチャプターの中味を知らなければならない。

２．チャプター５は小樽ツアーである

八戸の駅でたまたま出会った見ず知らずの蒸発男・兵頭を伴って函館に流れてきた寅さんは、そこでリリーと再会する（再会と言うのは、第11作「寅次郎忘れな草」で最初の出会いと別れがあったからだ）。再会の舞台となった夜更け屋台のラーメン屋で、「寅さん、あれからどうしてたの」「恋をしていたのよ」となる。そして面白可笑しく旅を楽しみながら列車で札幌を経て小樽へとやってくる。かくしてチャプター５は一つの完結した小樽物語の趣をなす。

<u>チャプター５冒頭のショット</u>

（小樽水天宮の高台から、国道５号線と函館本線が交差するあたりを中心に小樽の街の俯瞰。札幌方面からの汽車が小樽駅に向かう。右手には回転式ラウンジをいただくかつての北海ホテル。背後の丘の中腹には西陵中学校。小樽商大はやはり丘の中腹、左手の隅にその一部が確認できる。）

（小樽運河に架かる橋のうちで最も北に位置する北浜橋から見る小樽運河の北端。運河終端の向こうには日本冷蔵の今はなき大きな三角屋根の建物。）

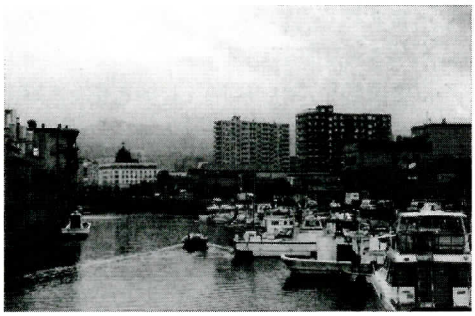
兵頭　：小樽……　ここが小樽か！　寅さん、僕が30年間夢に見た街ですよ！

寅次郎　：ほー、そんなにいいかね、この古くせえ街が。

兵頭　：この街には僕の初恋の人が住んでいるんです。学生時代、東京で知り合ったのが小樽の人だったんですよ。

寅次郎　：そんなに惚れてたの？

兵頭　：僕が生涯で一番愛した人かもしれませんねえ。（寅とリリー吹き出す。）考えてみれば、僕はこの街に来たくて旅に出たのかもしれないなあ。



（写真１）

小樽運河北端近くの北浜橋上で学生時代に東京で出会った小樽出身の彼女（堀田信子）を懐かしむパパ（兵頭謙次郎）。その背の向こう、写真左手に写る北海製罐の工場の建物は今も昔も変わらない。橋上から振り返って反対方向を眺めると、チャプター５冒頭近くの運河北端の景色がそのままであり、左手奥には市指定歴史的建造物の旧広海倉庫（1889）、旧右近倉庫（1894）、旧増田倉庫（1903）といった木骨石造倉庫群が当時の面影を伝えている。全長１キロ余りの運河のうち北端から３分の１程度が道路拡幅の影響を免れたため、運河の幅は狭められることなく、周辺も往時の景観をより豊かに保っている。

（水天宮に上る急な石段の小道）

リリー　：パパ、その人に会ってどうしようっていうのさ。

寅次郎　：今のかみさんと別れて、一緒になろうって考えなんだろ。

兵頭（パパ）：違いますよ。彼女は結婚して子供もいるはずだし……　僕はただ彼女の幸せな姿を垣間見るだけでいいんです。

寅次郎　：なんだ、それだけで来たのか？　はあー…くたびれたなあ。

（水天宮参道の石段。聖公会教会前。通りがかりの婦人に尋ねる。）

パパ　：あの、ちょっとお尋ねしますけど、この辺に堀田さんという家はありませんでしょうか？

婦人　：ああ、堀田さんならここでしたけど、もう引っ越しましたよ。

パパ　：そうですか……　いつごろ？

婦人　：一昨年だったかしら。ご主人が亡くなってね。家を売って、緑町で喫茶店をおやりですよ。確か「ポケット」って言ったかしら。

パパ　：そうですか。ありがとうございました。

・・・・・・・・・・・・

パパ　：寅さん……

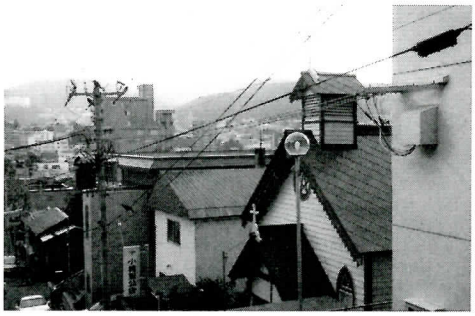
寅次郎　：聞いていたよ。オヤジ死んだんだって。

パパ　：どうしましょうか？

寅次郎　：行ってやれよ！

パパ　：そうですね。

寅次郎　　：俺たちはくたびれちまったから、１時間後に波止場で待ってらあ。
（慌てて階段を駆け降り、緑町に向かうパパの後ろから）
寅次郎　　：パパ、吉報を待ってるぞ！
パパ　　：はーい！
・・・・・・・・・・・・・
リリー　　：いい年をして、甘ったれだね、男なんて。
寅次郎　　：どうしてよ？
リリー　　：だってそうじゃないか。30年前の男が現れてどうのこうの言ったって、女にしてみりゃ迷惑な話だよ。陰気なおじさんの顔見てがっかりするだけよ。
寅次郎　　：お前も夢のない女だねえ。
リリー　　：夢じゃ食えないからね。



（写真２）

寅次郎とリリーの背景に写る小樽聖公会の教会は1907年（明示40年、それ以前は手宮にあった）から今も変わらずここにある。二人が会話するこの水天宮参道の石段から見下ろすと石の鳥居をくぐって国道５号線まで続く花園界隈が見渡せる。その景観は、聖公会の周囲の建物が変わったように、二人が見たときと今われわれが見るのとではやはり大きく違っているのだろうか。

（「ポケット」店内）
（いらっしゃいませ）
女子高生　：何にいたしますか？
(兵頭)謙次郎：コーヒーください。
・・・・・・・
子供　　：母さん、野球しに行ってくるよ。
（コーヒー出される）
常連客　　：あー腹減った。チャーハンできる？
信子　　：できるわよ。
謙次郎　　：（客を意識して慌てて席を立つ）あの、お金ここに置きますから。
（外に走り出て、鞄を忘れたことに気づき、戻ろうとするところに信子が鞄を持って出てくる。）
謙次郎　　：ああ、どうもすいません。
信子　　：謙次郎さんでしょ。

謙次郎　：お分かりですか？

信子　：お店入ってらしたとき、すぐ分りました。あなた、昔とちっとも変らないのねえ。

謙次郎　：そうですか。僕はまた、覚えてらっしゃらないんじゃないかと思って……いえ、出張で来たもんですから、お寄りしただけなんです。お元気そうで何よりです。

信子　：あのう、もう一度お入りになりません？

謙次郎　：いえ、僕、汽車の時間なんかあるものですから。……あのう……どうぞお幸せに。じゃ、僕これで…

（うつむき加減で足早に去ってゆく謙次郎。無言で見送る信子。）

（写真３）

「原田歯科医院」の看板（寅さんの時と今とでは看板も代替わりしている）が見えなければ同じ場所だとは気付かれにくいだろう。しかしはるか向こうに見える天狗山の山肌の傾斜面は少しも変わっていない。そして並木のプラタナスの成長は時の経過を告げている。信子が経営する小さな喫茶店「ポケット」は今はなく、右写真に写る緑町郵便局に変わっている。通りすがりの人にそんな変化は分かるはずもないが、映画の中で謙次郎があたふたとドアを開けた店の住所表示は小樽市緑「１－５－５」、そして現在の郵便局も間違いなく「１－５－５」なのだ。

（小樽港波止場）

（写真４）

人物がいなくなった右側の現在の場面ではあの繋留鋲こそが主役だ。今も変わらずそこにいる。そのすぐ下のコンクリートの踏み段の割れ目も相変わらずのようだ。しかしよく見ると同じ割れ方ではない。きっとこの間一度は修復されて、そして「懐かしさ」を演出するかのように、もう一度壊れて見せたのだろう。水の向こうの手宮・高島方面の丘の線も変わっていない。喧嘩別れした主人公たちが戻れば今にも物語は再開されそうだ。

寅次郎　：向こうも亭主と別れた後の話をしたかったんじゃねえのかな。それをすぐハイチャイじゃつれねえよ。

兵頭　：いえ、それでいいんです、それで。仮にそんな話があったとしても、今の僕に何ができるんです。僕って男は…僕って男は、たった一人の女性すら幸せにしてやることもできないだめな男なんだ。

リリー　：キザッたらしいねえ、言う事が。

兵頭　：どうしてです？

リリー　：幸せにしてやる？　大きなお世話だ！　女が幸せになるには男の力を借りなきゃいけないとでも思ってんのかい？　笑わせないでよ！

寅次郎　：でもよ、女の幸せは男次第だって言うじゃねえか。

リリー　：へー、初耳だね。あたし一度もそんな風に考えたことないね。あんたがたがそう思ってんだったら、そりゃ男の思い上がりってもんだよ。

寅次郎　：へー、お前もかわいげがない女だね。

リリー　：女がどうしてかわいげがなくちゃいけないんだい。寅さん、あんたそんな風だから年がら年中女に振られるんだよ。

寅次郎　：おい、リリー、言っていい事と悪い事があるんだぞ。

リリー　：だってほんとだろ。

寅次郎　：じゃ、おれも言ってやるよ。お前、すし屋の亭主と別れてやったなんて言ってるけどよ、ほんとは捨てられたんだろう。

リリー　：寅さん、あんたまでそんな事を……　あんただけはそんな風に考えないって思ってたんだけどね！

寅次郎　：……

（憤慨し、目に涙を浮かべて去ってゆくリリーの後を、彼女のスーツケースを抱えた兵頭が追い、三人の旅は終わる。一人残された寅は夕暮れ間近の波止場にうずくまる。）

3．チャプター５は寅さんの詩を理解する鍵である

これが、些細なことから喧嘩別れに終わる「小樽物語」の顛末であり、それは同時にある昼下がりの少し物悲しくやるせない小樽の街ツアーともなって印象に残る。この３人はどうして小樽にやってきたのだろうか。チャプター５は昼下がりの街を水天宮の高台から俯瞰するシーンから始まり、夕暮れ間近の埠頭での喧嘩別れで終わる。そしてそれきり小樽は15話の作品中には登場しない。この街で寅さんは本職のテキヤ商売をするわけでもなく、リリーはキャバレーで歌うこ

ともないままに去ってしまう。要するに二人はこれといった目的なく小樽にやってきた。実は３人が小樽にやってきたのは、30年間この街とそこに住むかつての恋人を気にかけていた兵頭の願いにつきあってのことだったのだ。「考えてみれば、僕はこの街に来たくて旅に出たのかもしれないなあ」という感慨を兵頭に言わせるためのエピソードとして、このチャプター５はシリーズ15話の中にセットされた「物語の中の物語」なのである。

チャプター５は、一つの喜劇の中の隠れた重要な一こまとして挿入されながら、笑いを取ることがまったくない。兵頭謙次郎が主人公となるチャプター５の物語には何も起こらないし、したがって登場人物の人生が変わることもない。昔の恋人の夫は２年前に亡くなったという。そのため彼女は今は小さな喫茶店を女一人で切り盛りしている。傍から見ればそれは生活の大きな変化かも知れないが、本質的には同じ日常を維持継続するための変わらぬ努力ということに他ならないとも言えるだろう。そうだとしたら、その努力する「日常」に、かつての「理想」の面影を求めても空しい。無論それはその「日常」を壊してみなければ吉凶いずれの相が出るかはわからない。いずれにしても兵頭はそれをせず、「どうぞお幸せに」とだけ言って立ち去りながら、後になって「僕って男は、たった一人の女性すら幸せにしてやることもできないだめな男なんだ」と自己卑下してみせる。

兵頭のこの一言がきっかけで寅さんとリリーの口論は喧嘩別れに至ることになる。寅さんは、「向こうも亭主と別れた後の話をしたかったんじゃねえのかな。それをすぐハイチャイじゃつれねえよ」と兵頭の不作為を軽く責めるが、リリーのほうは、「幸せにしてやる？　大きなお世話だ！　女が幸せになるには男の力を借りなきゃいけないとでも思ってんのかい？」と男の思い上がりを手厳しく叩く。だが対立するこれら二つの意見を同時に聞かされる兵頭にとっては、「あんたにだって何かできたかもしれないけど、結局何もできなくて、それでよかったんだよ」と、彼の断念を正当化してくれる慰めの言葉のようにも聞こえたのではないだろうか。そう思わせられるのは、直後涙目のリリーは憤然として立ち去り、彼女の荷物を抱えてそのあとを追う兵頭はそのまま「無事」東京の家族のもとに戻ることになるからである。

寅さんは、余計なひと言を口走ったことを悔やみつつ、二人が立ち去って日も傾きかけた埠頭に悄然としゃがみ込むところでチャプター５の小樽ツアーは終わる。以後物語はすべて東京で展開するのだが、普通のカタギの人間の憧れと断念の「小樽物語」を体現する兵頭がそこかしこに登場することで、寅さんとリリーの絡みにフーテン同士の戯れ以上の意味が重層化される。兵頭にとって寅さんの生き方とリリーとの関係は、自分が実現できなかった理想と映るからだ。

チャプター８（兵頭パパ、とらやへ行く）

兵頭　：僕は近ごろ、寅さん、あなたがうらやましくてね。家じゃ家族の者が白い目で見ますし、会社へ行けば役職を取られてすることはないし……何のために生きているんだか……一体僕の人生は何なのかを考えますとね……寅さん、僕はあなたがうらやましくて……

寅次郎　：パパの気持ちはよっく分かるけどさ、そっちと俺と立場を換えるわけにはいかないんだから、辛抱しろよ。よく言うだろ、上を見たらきりがないってね。

ここで寅さんが「上を見たらきりがない」と言うのは全く無自覚な冗談なのだが、この一言は、フーテン／カタギの対立を脱臼させ、他人の生活を羨望する／羨望される関係を奇妙に転

倒して見せている。そしてこうした価値観や視点のさり気ない転倒が、物語の意味性といったものに誰もが共感できるような幅広さをもたらしているのだと考えられる。

あるいはまた：

同（とらやからの帰りがけ）

兵頭　　：あのう、さくらさん。寅さんとリリーさんいつ結婚なさるんですか。
寅次郎　：おい！　馬鹿なこと言うなよ。しらけるなあ。
兵頭　　：いえ、式には是非呼んでいただきたく……本当に呼んでくださいね！
寅次郎　：素人はつきあいきれねえよな。

兵頭は、素人のカタギの自分には手の届かなかった「幸せ」が、フーテン同士の寅さんとリリーが結びつくことで現実のものになりうると期待している。それは、自分自身は現実のものとして手にすることは叶わなかったけれど、自分に代わる誰かがその理想を成就してくれるならば、かつて自分が抱いた夢が「正夢」となりうるものであったこと、つまり「真実」であったことを証してくれるからである。しかしその期待は外れる。

兄思いの妹さくらがリリーに、「お兄ちゃんの奥さんになってくれたら・・・」と本気で話すと、リリーは「いいわよ、私みたいな女でよかったら」と答えてみんなを喜ばす。しかし：

寅次郎　：リリー、お前も悪い冗談やめろよ。まわりは素人だから、みんな真に受けちゃってるじゃねえかよ。

と取り合わない。「冗談だろ？」と言う寅さんに対してリリーが、「そう・・・冗談にきまっているじゃない」と答えて夕闇の外に消えた後、「どうして追っかけて行かないの」と責めるさくらに寅さんが応える。「あいつは頭のいい、気性の強いしっかりした女なんだよ。俺みたいな馬鹿とくっついて幸せになれるわけがねえだろ」。周囲の期待のみでない、自分の希望をも断念する寅さんの、全作品を通じて最も理知的な場面である。

次いで寅さんはさくらに語る：

寅次郎　：あいつも俺と同じ渡り鳥よ。腹すかせてさ、羽けがしてさ、しばらくこの家に休んだまでのことだ。いずれまたパッと羽ばたいてあの青空へ・・・。

リリーが去り、寅さんもまた旅に出た後日のとらやを訪れた兵頭がことの次第を聞かされ、寅さんのこの言葉を反芻しながらしみじみと言う：

兵頭　　：なるほどね、寅さん詩人ですねえ。（おいちゃんとさくら吹き出す。）

兵頭が詩人寅さんの言葉に感じ入るのは、まさに兵頭自身がチャプター５の物語を背負っているからに他ならない。そして兵頭が寅さんのこの言葉に深く納得できるのは、自分の対蹠点にいる羨むべき存在とあこがれていた寅さんが、実は何一つ束縛を受けぬ自由気ままを生きているわけでなく、しかるべきところで自らの願望を断念する気構えを見せるからなのだ。そし

てその気構えは、ただ単にやせ男の我慢と強がりであるだけでなく（多分にそうではあるのだが)、近しき者、愛しき者の幸せを優先せずにいられない優しさの表現形にほかならない。そしてこれこそがシリーズすべての作品に通底する基本テーマなのである。

シリーズ15話「寅次郎相合い傘」という作品は、先に見た梗概からも分かるように、チャプター５を抜きにしてもストーリーは出来上がるのだが、実は、兵頭謙次郎というあまり冴えないしかし愛すべき男が主人公となるこの平凡極まる「小樽物語」が物語の中の物語として存在しなかったならば、この作品の意味はこれほど豊かで、多くの観客の共感を得られる傑作とはならなかったであろう。

＊ 本文中で使用した写真については映像使用許可申請済み。

1 井上ひさし監修『寅さん大全』筑摩書房、1994、

2 同書ｐ．28